まほろん令和７年度

第１回

館長講演会

- Lecture meeting by the director of mahoron -

日本歴史の扉を開いた遺跡（１）

大阪府仁徳陵古墳・奈良県箸墓古墳

ー　古　墳　時　代　ー

まほろん館長　　石川日出志

令和7年6月14日(土)　まほろん講堂　13:30～15:00

13:00　受付開始・開場

まほろん館長講演 2025 年間計画

館長　石川日出志

■年間テーマ：　日本歴史の扉を開いた遺跡を語る（４回）

現在、私たちは日本歴史を、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代という時代の連なりで理解しています。これら各時代は、飛鳥・藤原・奈良時代といった文字史料を念頭に置いた時代区分とは異なり、考古資料に基づいて認識されたものです。各時代がどのように設定されたのかを紹介します。現在の考え方にも触れましょう。

□第 1 回（6 月 14 日）：　古墳時代―大阪府仁徳陵古墳・奈良県箸墓古墳―

江戸時代に古代の天皇陵に関する関心が高まり、その探索が進みます。前方後円墳という名称も江戸時代に考案されました。歴史を解明するために古墳を発掘する取組みもありました。やがて明治年間になって歴史学・考古学が盛んになると「古墳時代」という時代も提唱されます。考古資料を用いて日本歴史のなかの一時代を認識する始まりです。しかし、時代の制約から本格的な議論は困難でした。戦後、そこから解放されます。

□第 2 回（8 月 23 日）：　縄文時代―東京都大森貝塚―

日本における近代的考古学は 1887（明治 10）年に、E.S.Morse が大森貝塚を発掘し、２年後にその研究報告が出されたことに始まります。そこからやがて縄文時代という時代が認識されるようになっていきます。「古墳時代」という時代名称が提案される前のことですが、古墳をつくる人々とは異なるという意識があるので、古墳以後の歴史と対比してみていることになります。

□第 3 回（9 月 21 日）：　弥生時代―東京都弥生町遺跡―

東京大学裏にある弥生町向ヶ岡貝塚から 1884（明治 17）年に 1 個の壺が見つかります。次いでそれが、通常貝塚から見つかる土器（現在の縄文土器）と異なる特徴があると判明して弥生式土器と命名され、やがて縄文時代と古墳時代の間をつなぐ独自の時代の指標とわかって弥生時代という時代名称が一般化します。

□第 4 回（12 月 7 日）：　館長が半世紀前に憧れた卒業論文―丹羽茂氏をお迎えしてー

1971 年、丹羽茂氏の卒業論文が『福島大学考古学研究会研究紀要』第 1 冊として公にされ、翌年増刷されます。福大に考古学の専任教員がいないにもかかわらず、この卒論は当時の縄文時代研究の最先端を行くものでした。なぜこのようなことが実現したのでしょうか。当時の福島県内の考古学の様子を含めてお話を伺いたいと思います。

□第 5 回（2 月 21 日）：　旧石器時代―群馬県岩宿遺跡―

戦前、日本歴史は縄文時代から始まると考えられていました。ところが 1949 年に岩宿遺跡が発掘されて、日本列島にも縄文時代以前の人類文化が実在することがわかりました。岩宿遺跡の調査成果がどのようなもので、その後どのような議論があったのかを紹介します。

第１回：　古墳時代―大阪府仁徳陵古墳・奈良県箸墓古墳―

まほろん館長　石川 日出志

【導入】　江戸時代に古代の天皇陵に関する関心が高まり，その探索が進む。前方後円墳という名称も江戸時代に考案された。歴史を解明するために古墳を発掘する取組みもあった。やがて明治年間になって歴史学・考古学が盛んになると「古墳時代」という時代も提唱される。考古資料を用いて日本歴史のなかの一時代を認識する始まりである。しかし，時代の制約から本格的な議論は困難だった。戦後，ようやく自由な議論ができるようになった。

＊プリントは根拠資料を提示したので堅く感じるでしょうが，講演では優しく語ります。

１.仁徳天皇陵古墳とは　【１～５】

（１）所在地：　大阪府堺市堺区大仙町に広がる百舌鳥古墳群のほぼ中央　【１】

（２）日本最大の古墳＝世界最大の前方後円墳　【２・３】

・江戸時代に描かれた仁徳陵古墳　【３】

①．前方後円墳：　仁徳陵古墳の測量図を見てみよう　【２】

・地震による墳丘の崩落で墳形の判読が難しくなっている　→　判読の方法　【６】

②．前方後円墳の大きさを知る難しさ：従来と現在認識される規模の違い

・周濠水位をどう考えるか？　近世に溜池機能を高めた．

・従来―現在比較：　墳丘全長 478m―512m，後円部径 245m―284m，前方部幅 300m―352m，墳丘体積 1,405,866 ㎥ ―2191

③．この古墳をどう呼ぶのか？

・百舌鳥耳原中陵（もずみみはらのなかのみささぎ）＝宮内庁陵墓名称

・仁徳天皇陵

・伝仁徳陵古墳

・大仙（山：だいせん）古墳：　地名（字名）＝考古学的名称

→　天皇（大王）比定が妥当なのはごく一部にすぎないことに注意．

④．現在は陵墓として宮内庁管理（江戸時代から次第に制限）．

・ただし，陵墓の保全・補修に際して考古学的な措置をとる．

・17 学協会代表者にのみ，主に修繕時に立ち入り観察を認める．

（３）過去に埋葬施設・遺物が発見された！

①．1872 年（明治 5），前方部斜面で（長持形）石棺（長さ 2.7m，幅 1.45m），甲冑が出土　【３下左・４】

②．1698 年（貞享二）後円部盗掘坑を埋め戻し．1698 年（元禄十一）・1722 年（享保七）に修陵．1755 年（宝暦七）『全堺詳志』に「御廟は北にあり，石の唐櫃あり」＝長さ 3.18m・幅 1.65m．　【３下右：推定復元】

③．アメリカ・ボストン美術館に「伝仁徳陵古墳・百舌鳥古墳群」出土遺物　【５】

（4）現在の位置づけ　【7】

・須恵器大甕や埴輪から古墳時代中期：5 世紀中ごろ

・南朝宋に遣使した「倭の五王」（讃：421 年，珍：438 年，済：443 年，興 462 年，武：477 年）の時代

2．「古墳時代」という用語の始まり：

・八木奘三郎 1896（明治 29）「日本の古墳時代」『史学雑誌』第 7 巻第 11 号　【8 下右】

…「吾邦上古の時代に当たりて人々広大なる墳墓を築造し，以て死者の霊魂を慰せしことあり．予は便宜上当時を目して日本の古墳時代と謂う．」

→　天皇陵が多いがそうでない墳墓もある．それが特徴的な時代を「古墳時代」と命名．

→　考古資料により歴史上の一時代を命名する始まり．（八木はのち「高塚時代」を使用．）

＊大森貝塚の調査・報告など 1870 年代にはすでに石器時代という認識はあったが，それも天皇陵などの古墳が視野にあってのこと．では，天皇陵・古墳はどう認識されてきたか？

3．天皇陵・古墳への関心・探求の歩み

（1）古代の天皇陵への関心・記事：仁徳陵を例に

・『古事記』：　大雀命（おおささぎのみこと／仁徳天皇）の御陵は毛受之耳原（もずのみみはら）に．

・『日本書紀』：　仁徳八七年（399），百舌鳥野陵（もずのみささぎ）に葬る．

・『延喜式』（巻 21 諸陵式）：　仁徳・履中・反正三陵が百舌鳥耳原中陵・南陵・北陵．【1】

→　現在の宮内庁はこれに基づいて三陵を比定．しかし，平安時代の認識なので史料批判が必要＝事実と確定することはできない．

（2）「古墳」に関する江戸時代の関心　【9】

・徳川光圀：　延宝四年（1676）に発見された那須国造碑に見える「那須国造直韋提（いで）」の墓を知るために，元禄五年（1692）に大田原市湯津上：上侍塚・下侍塚古墳を発掘．

・松平定信（白河藩第 3 代藩主）：　寛政十二年（1800）頃『集古十種』編む．弥生時代～古代の各種資料を集成図示．各地の古墳出土の武器・馬具・銅鏡など．

・蒲生君平：　文化五年（1808）『山陵志』．「前方後円墳」の名称．

・文久の修陵：　文久二年（1862）～で「神武天皇」陵造営

（3）明治期の国家政策：　王政復古，古代文化と西欧国家制度に照らした近代天皇制国家建設

・久米邦武（筆禍）事件：　1892 年「神道は祭天の古俗」『史海』8　【8 上】

西欧流の文明史観派のひとり，久米の論文を，天皇制批判とみなして国体史観派が糾弾して．東大を追放．　→　やがて戦前の皇国史観絶対視を生むことに．

（4）「古墳時代」探求が大きく制約される

・偶然工事中に発見された古墳出土品により，各種遺物研究は進展．

・一方，古墳がつくられた時代は「大和朝廷」の時代＝記紀（古事記・日本書紀）の記述と抵触するために，時代・社会・歴史の議論は封印される．

・時代名称：　後藤守一 1927『日本考古学』＝「先史時代」～「原史時代」～「歴史時代」

後藤 1938「古墳文化」『日本文化史大系』1＝「古墳時代」！　【8 下】

４．戦後，古墳時代研究が皇国史観の呪縛から解かれる　【１０】

（１）小林行雄による古墳時代理解の基本：1951『日本考古学概説』創元社

・「貴族の墳墓が顕著なる存在となった古墳時代」，「その私有せる財富と政治的権力とを以て，一般地方民衆の上に君臨するとともに，畿内を中心とし，そこに最高峰を有する共通の文化を保持した」といった「畿内の優越性」・「大和に占拠する権力者の政治的優越性を意味し，天皇制国家の成立を立証するか否か，これまた軽々しく断じえない大きな疑問である」(p.12)．

⇒　戦前の「大和朝廷」のイメージを払拭する試みだが，研究の枠組みを小林が長く堅持．

（２）1989 年小林行雄死去ののち，古墳時代，とくに古墳研究の見直しが大きく進む．

（例）都出比呂志 1991「日本古代の国家形成論序説―前方後円墳体制の提唱―」『日本史研究』347（都出 2005『前方後円墳と社会』塙書房，所収）

北條芳隆・溝口孝司・村上恭通 2000『古墳時代像を見なおす』青木書店

（３）現在，古墳（前方後円墳）の出現はどのように考えられているのか？

①．「定型的前方後円墳」の出現　【１１】

・定形的な前方後円形の墳丘（葺石）

・後円部に竪穴式石室

・中国（後漢・魏）鏡の多数副葬

②．畿内を中心とする地域最有力首長どうしの連携関係　【１２】

・「同笵」三角縁神獣鏡の分有関係

・定形的前方後円墳規格の共有，箸墓古墳を頂点とする格差序列

③．その中心はオオヤマト古墳群であり，起点は纒向遺跡の形成　【１３】

＊邪馬台国所在地論争とは別に，古墳時代社会の形成はここに始まる

【参考文献・図引用文献】（上掲のもの以外）

・石川日出志 2016『農耕社会の成立』岩波新書（10 刷版）

・石野博信 2008『邪馬台国の候補地 纒向遺跡』シリーズ遺跡を学ぶ 051，新泉社

・一瀬和夫 2009『古墳時代のシンボル 仁徳陵古墳』シリーズ遺跡を学ぶ 055，新泉社

・大阪府史編纂専門委員会 1978『大阪府史』第 1 巻，大阪府

・橿原考古学研究所 1997『大和の前期古墳Ⅱ 下池山国府・中山大塚古墳調査概報 付.箸墓古墳調査概報』学生社

・橿原考古学研究所 2001『大和の前期古墳Ⅳ ホケノ山古墳調査概報』学生社

・京都大学文学部考古学研究室 1989『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』京都大学文学部

・末永雅雄（編）1961『日本の古墳』朝日新聞社

・新納　泉 1992「Ⅴ古墳時代　1 時代概説」『図解・日本の人類遺跡』東京大学出版会

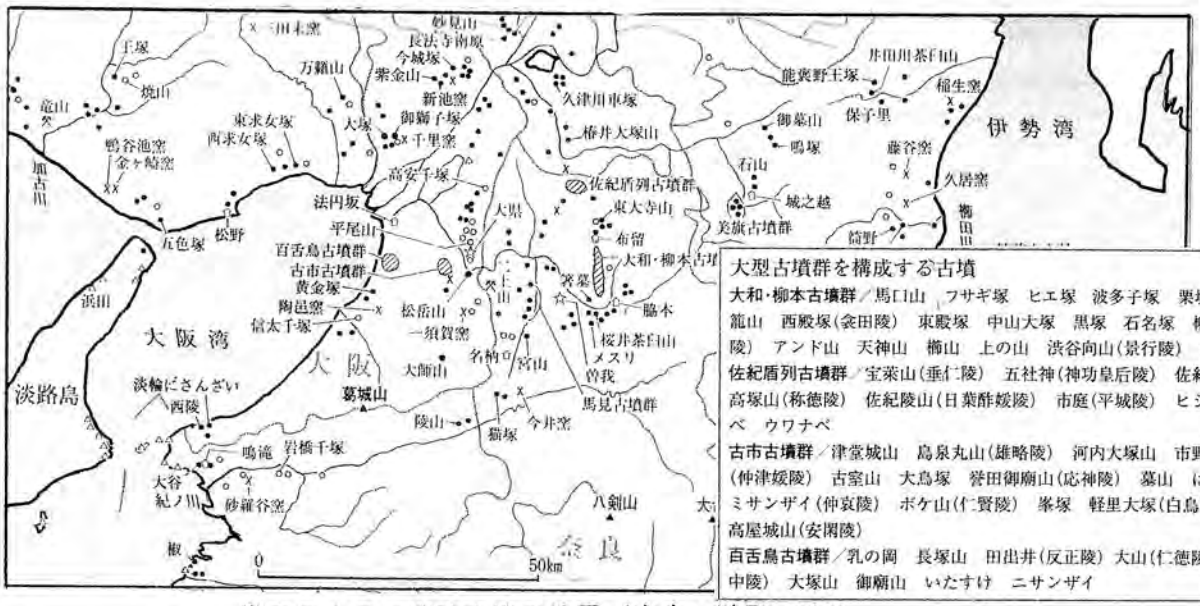
・斎藤　忠 1979『日本考古学史資料集成 1　江戸時代』斎藤考古学研究所

・白石太一郎 1989『古代を考える 古墳』吉川弘文館

・白石太一郎・春成秀爾ほか 1984「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』3

・田中　彰・宮地正人 1991『歴史認識』日本近代思想大系 13，岩波書店

・山中一郎・狩野　久 1992『新版古代の日本５　近畿Ⅰ』角川書店



大型古墳群を構成する古墳

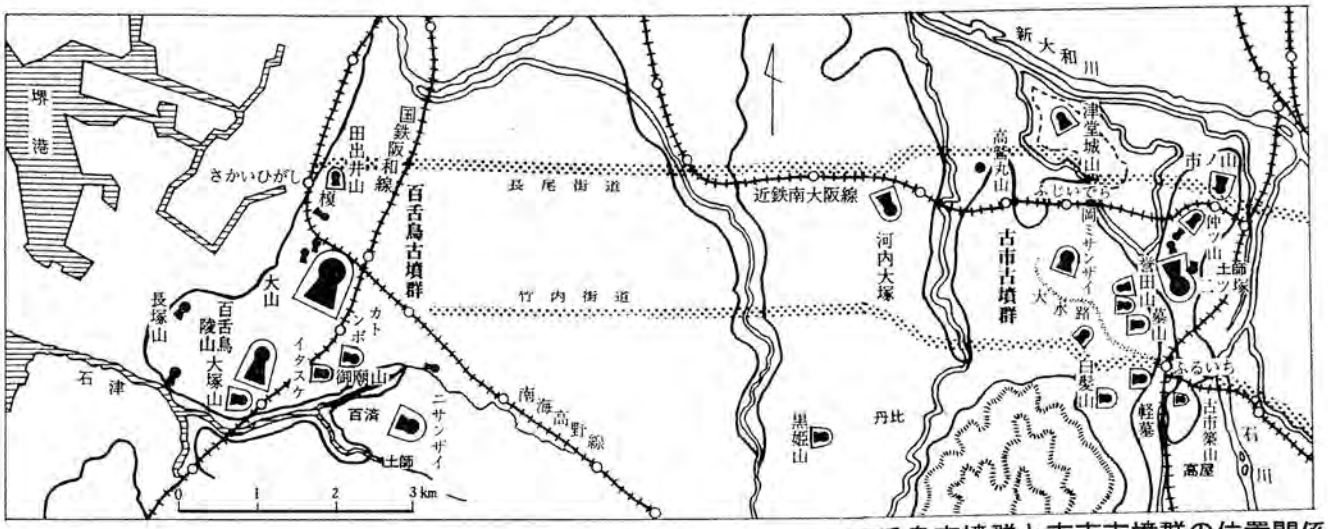
大和・柳本古墳群／馬口山　フサギ塚　ヒエ塚　波多子塚　栗塚　下池山　西山塚　燈籠山　西殿塚(衾田陵)　東殿塚　中山大塚　黒塚　石名塚　柳本大塚　行燈山(崇神陵)　アンド山　天神山　櫛山　上の山　渋谷向山(景行陵)　シウロウ塚

佐紀盾列古墳群／宝莱山(垂仁陵)　五社神(神功皇后陵)　佐紀石塚山(成務陵)　佐紀高塚山(称徳陵)　佐紀陵山(日葉酢媛陵)　市庭(平城陵)　ヒシアゲ(磐之媛陵)　コナベ　ウワナベ

古市古墳群／津堂城山　鳥泉丸山(雄略陵)　河内大塚山　市野山(允恭陵)　仲津山(仲津媛陵)　古室山　大鳥塚　誉田御廟山(応神陵)　墓山　はざみ山　野中宮山　岡ミサンザイ(仲哀陵)　ボケ山(仁賢陵)　峯塚　軽里大塚(白鳥陵)　白髪山(清寧陵)　高屋城山(安閑陵)

百舌鳥古墳群／乳の岡　長塚山　田出井(反正陵)　大山(仁徳陵)　永山　石津丘　(履中陵)　大塚山　御廟山　いたすけ　ニサンザイ

畿内の中の仁徳陵古墳の位置（山中・狩野 1992）



百舌鳥古墳群と古市古墳群の位置関係
（大阪府史編纂委 1978）

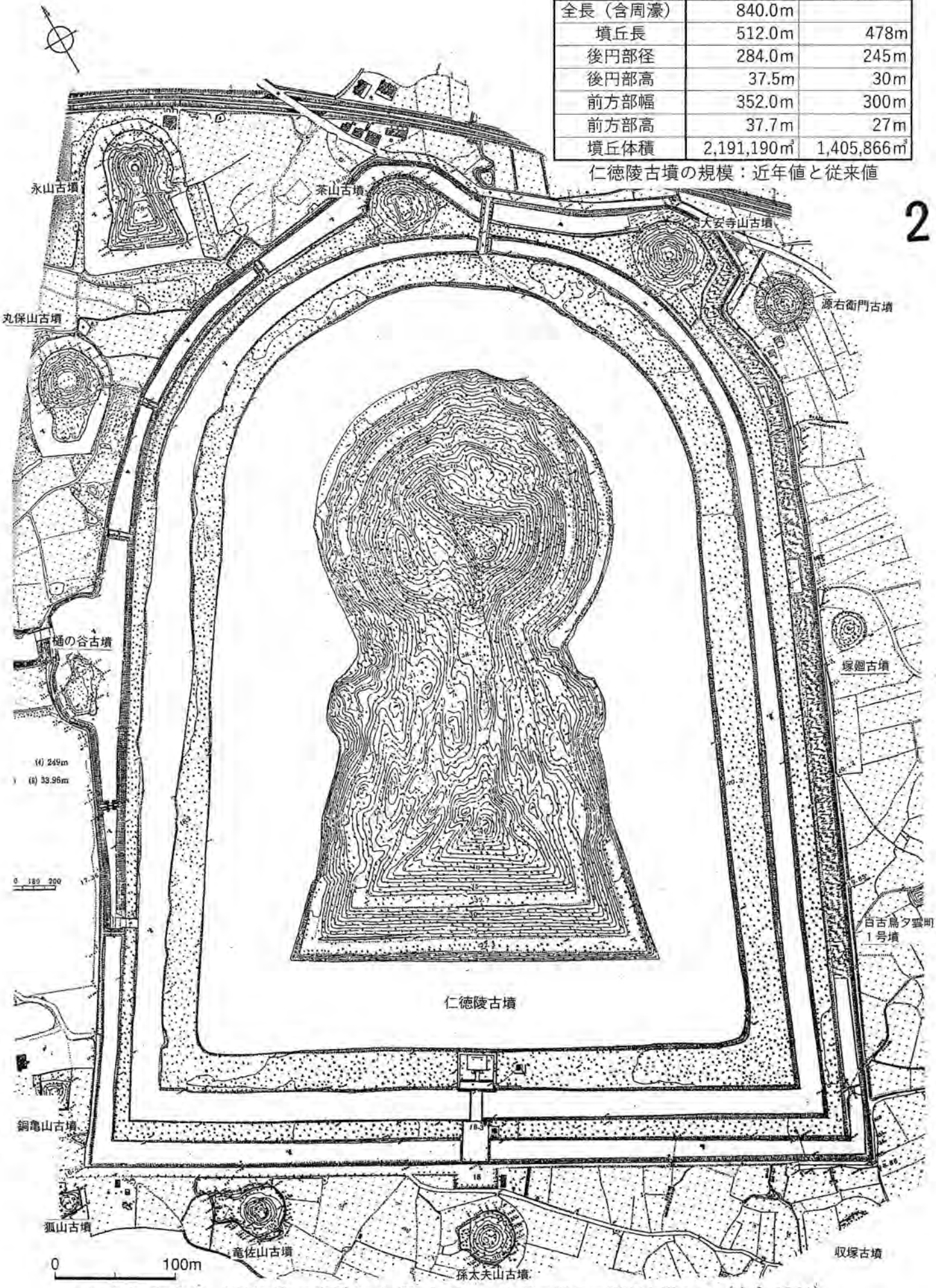
百舌鳥古墳群（一瀬 2009）

大阪府堺市大山古墳
（伝仁徳天皇陵）（１）：位置

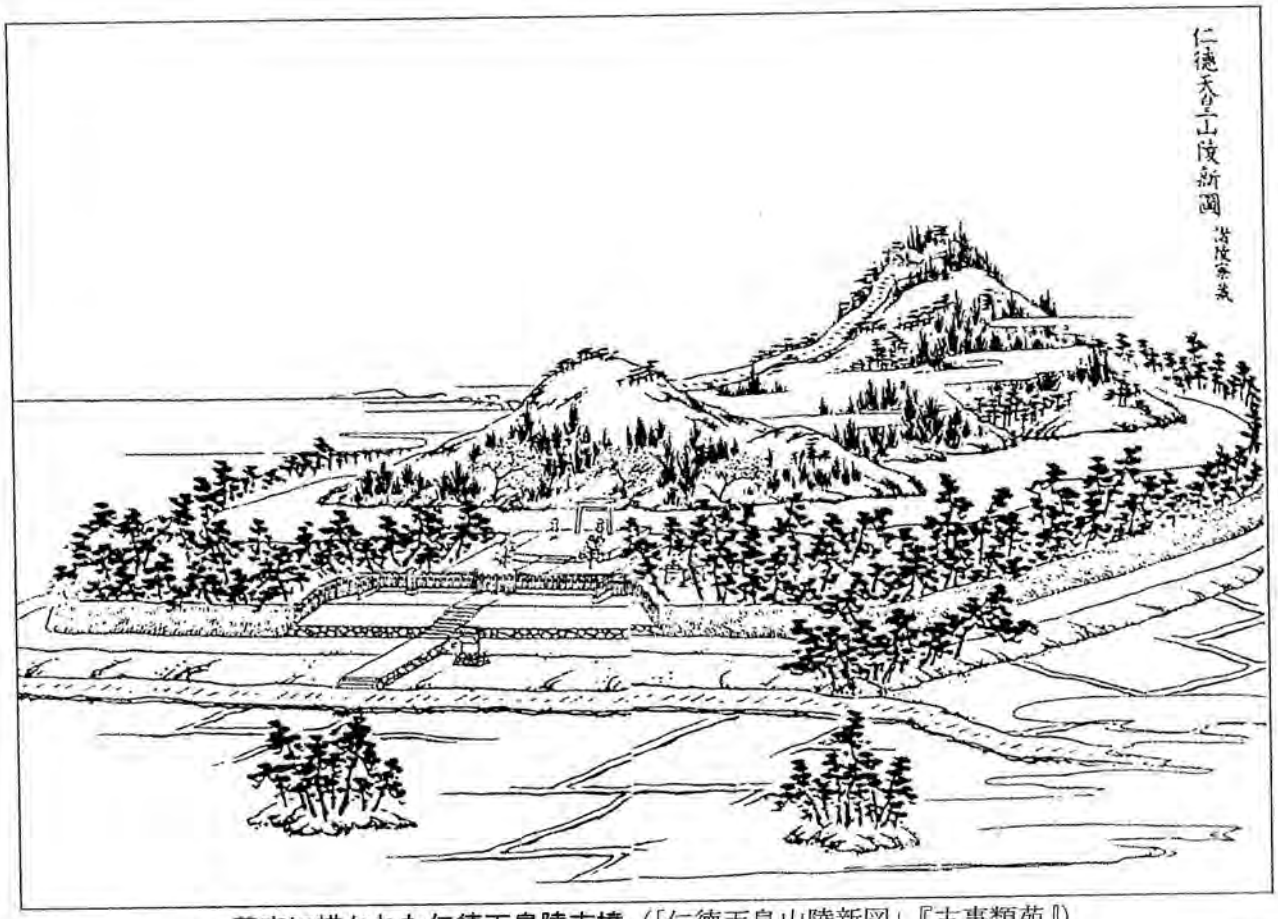
	一瀬2009	従来
全長（含周濠）	840.0m	
墳丘長	512.0m	478m
後円部径	284.0m	245m
後円部高	37.5m	30m
前方部幅	352.0m	300m
前方部高	37.7m	27m
墳丘体積	2,191,190㎥	1,405,866㎥

仁徳陵古墳の規模：近年値と従来値

2



大阪府堺市大山（伝仁徳天皇陵）古墳（２）： 地震で墳丘の崩落が激しい（末永 1961）



幕末に描かれた仁徳天皇陵古墳（「仁徳天皇山陵新図」『古事類苑』）

江戸時代の後円部発見石棺の復元（一瀬 2009）

明治 5 年発見の前方部石棺（一瀬 2009）

大阪府堺市大山（伝仁徳天皇陵）古墳（３）

大阪府堺市大山（伝仁徳天皇陵）古墳（４）：　前方部発見石室の副葬品（一瀬 2009）

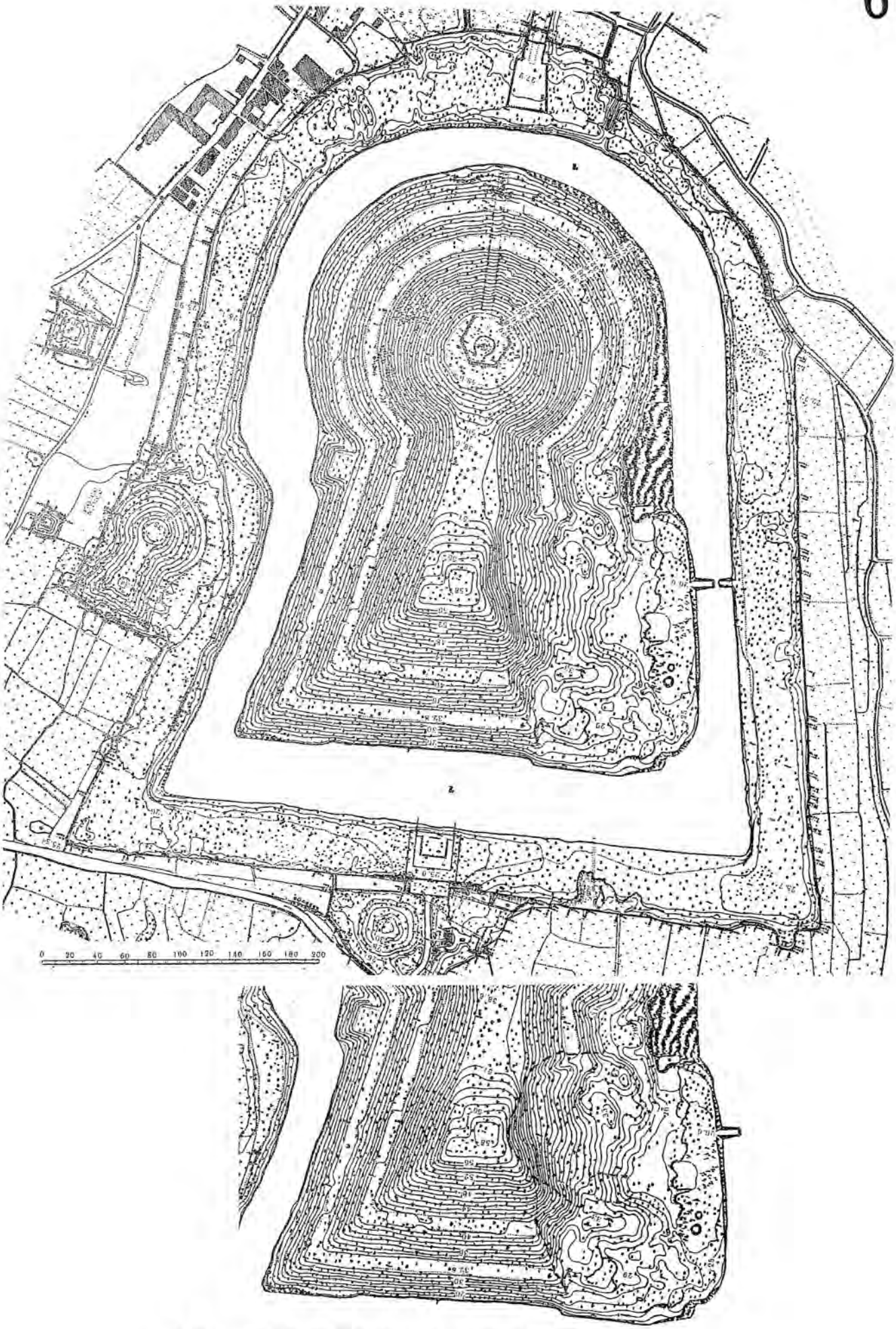
細線式獣帯鏡（踏返し鏡）：径 23.5 ㎝

単龍環頭大刀：現存長 23.0 ㎝

三環鈴：左右 13 ㎝

馬鐸：右高さ 18.7 ㎝

大阪府堺市大山（伝仁徳天皇陵）古墳（５）：
ボストン美術館の伝仁徳陵古墳出土品（一瀬 2009）



参考： 大阪府誉田御廟山（伝応神陵）古墳（末永 1961）

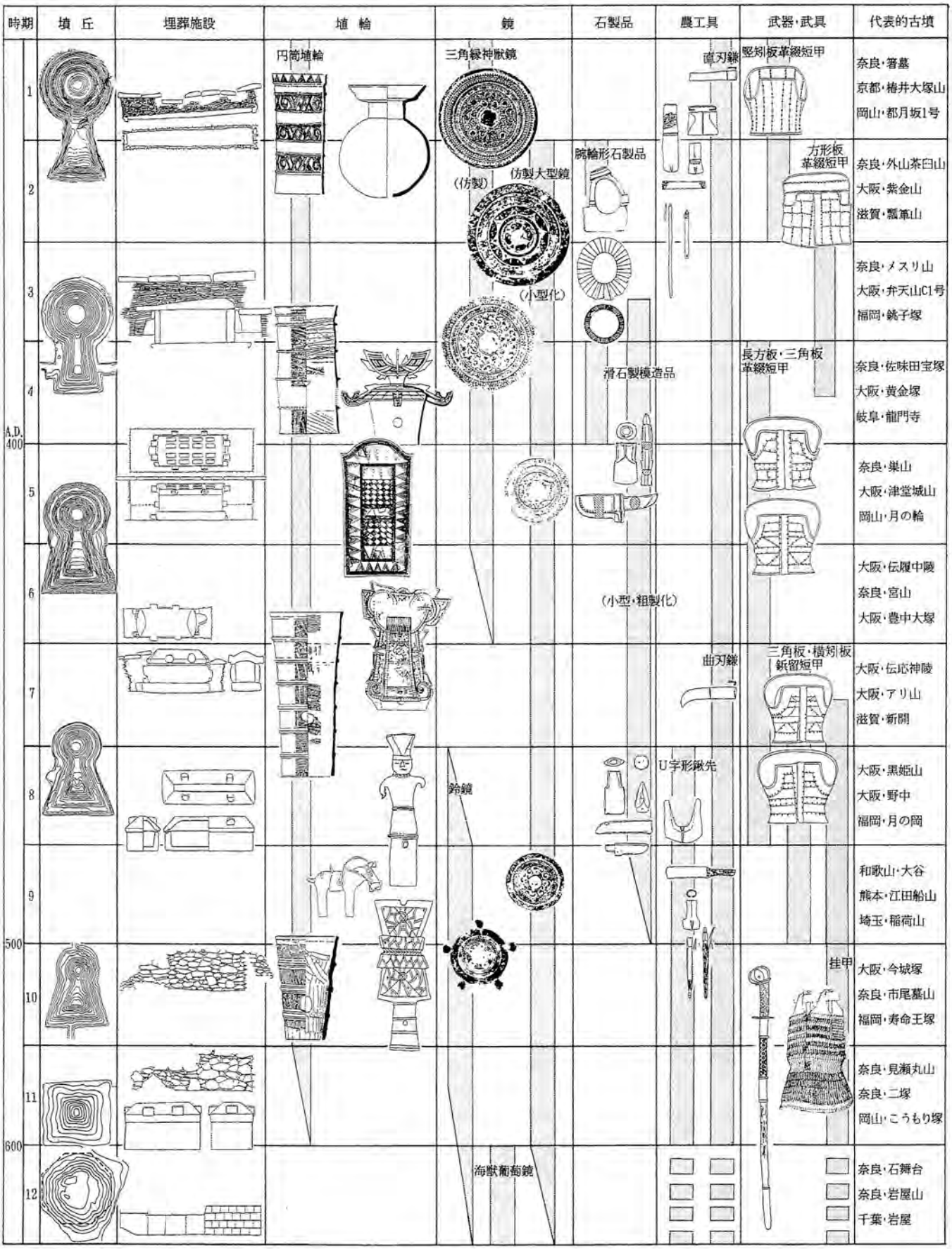


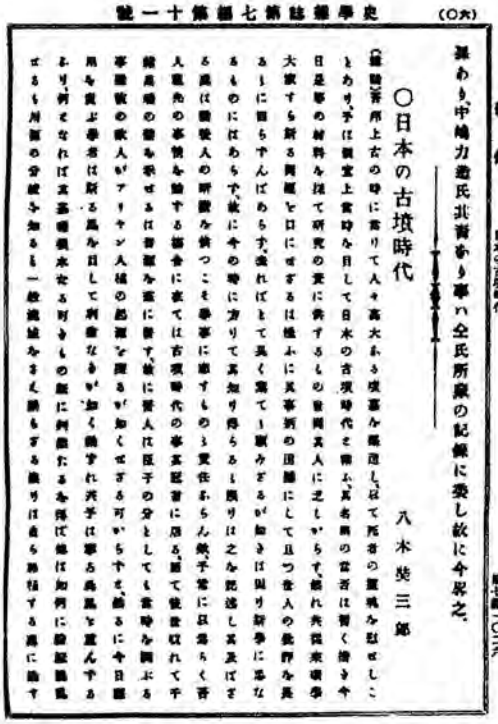
図3 古墳と副葬品の変遷　和田晴吾による編年案を参考に，時期による変化のはっきりした要素を選んで，その消長を図示した．階層による格差が大きい墳丘や埋葬施設については，おもに大王墓級の古墳における変遷を表わした．

古墳時代：古墳と副葬品の変遷（新納 1992）

神道は祭天の古俗

解題　本論文は「史学会雑誌」の第二篇第二三―二五号（明治二十四年十月号―十二月号）に掲載され、つづいて田口卯吉の主宰する「史海」第八巻（明治二十五年一月二十五日）に転載されたものである。久米邦武の執筆意図は、古代史研究の際避けることの出来ない古代における神道の宗教的位置づけを確定するところにあった。彼はこの目的をもって、中国をはじめとする東アジア諸地域の古代における宗教・祭祀関係史料を博捜し、一種の宗教社会学的な方法を使って論を展開していく。そして彼はそれを総括して、日本人をふくむ古代の未開社会の人々にあっては、いずれも、天に存在し、万物を主宰し、禍福を人間に下す天神を想像し出し、これを祭っていたのだと結論し、その後人々は、この天神より地祇を考え出し、さらに人鬼を考案し、ついに物怪を信ずるに至ったのだとする。このような普遍的な宗教発生論を前提として、彼は仏教伝来以前の神道とそれに関連する諸祭祀を次のように性格づける。第一に、神道には仏教のような宗教性が欠如している。それは、より未開な段階で発生した、天を祭り、攘災招福の祓をするだけのものにすぎないこと。第二に、日本の神道には地祇・人鬼を崇拝する習俗は存在していなかったこと。第三に、神社は祭天の堂であったこと。第四に、伊勢神宮は皇祖天照大神を祭った皇室の宗廟ではなく、宮趾であること。第五に、三種の神器は祭天の祭具であること。第六に、新嘗祭・大嘗祭は天を祭る儀式であったこと。右のように神道を性格づけた上で、彼は豊かな宗教性を有する仏教の伝来を高く評価し、もし神道のみであったならば日本の不幸は「実に甚し」かった、と結論する。この結論は、彼においては神道家への鋭い批判の意味をも持っていたのであり、従って本論文の末尾に「世には一生神代巻のみを講じて、言甲斐なくも、国体の神道に創りたればとて、いつ迄も其殻裸の裏にありて、祭政一致の国に棲息せんと希望する者もあり。此活動世界に、千余百年間長進せざる物は、新陳代謝の機能に催されて、秋の木葉と共に揺落さるべし」と久米は断言するのであった。本論文は、久米にあっては天皇制そのものの批判を意図したものではなく、逆に、主観的には、より安定した基盤の上にそれを位置づけさせたいとの意図のもとに執筆されたものであったと考えられる。ただし、彼は神道批判の徹底化が招来するものを十分に意識し、皇室に関しては、あくまでも「天神の子」、「天神の子孫」と明言し、天孫降臨そのものをも認める形で叙述を展開している。官学の中で、このように明解な古代神道研究が出たことを、すぐれた文明史家であった田口卯吉が看過するわけがなかった。早速「史海」に転載し、前書・後書にある如く、神道家に「挑戦状」をつきつけたのである。しかしながら、近代天皇制イデオロギーと神道との関係の深さを、久米も田口も見誤っていた。「揺落」されたのは神道家ではなく久米だったのである。明治二十五年三月四日、久米は非職とされ、翌五日、本論文を掲載した「史学会雑誌」と「史海」は発行停止の処分を受けたのである。しかも、この逆転劇には、彼の論理のアキレス腱が物の見事に機能させられた。「想像中より出でたる神に子孫ありと云ふ。実に不可思議ならずや」と。

＜久米邦武（筆禍）事件＞：西欧流の歴史学が国体史観派に排斥された（田中・宮地 1991）

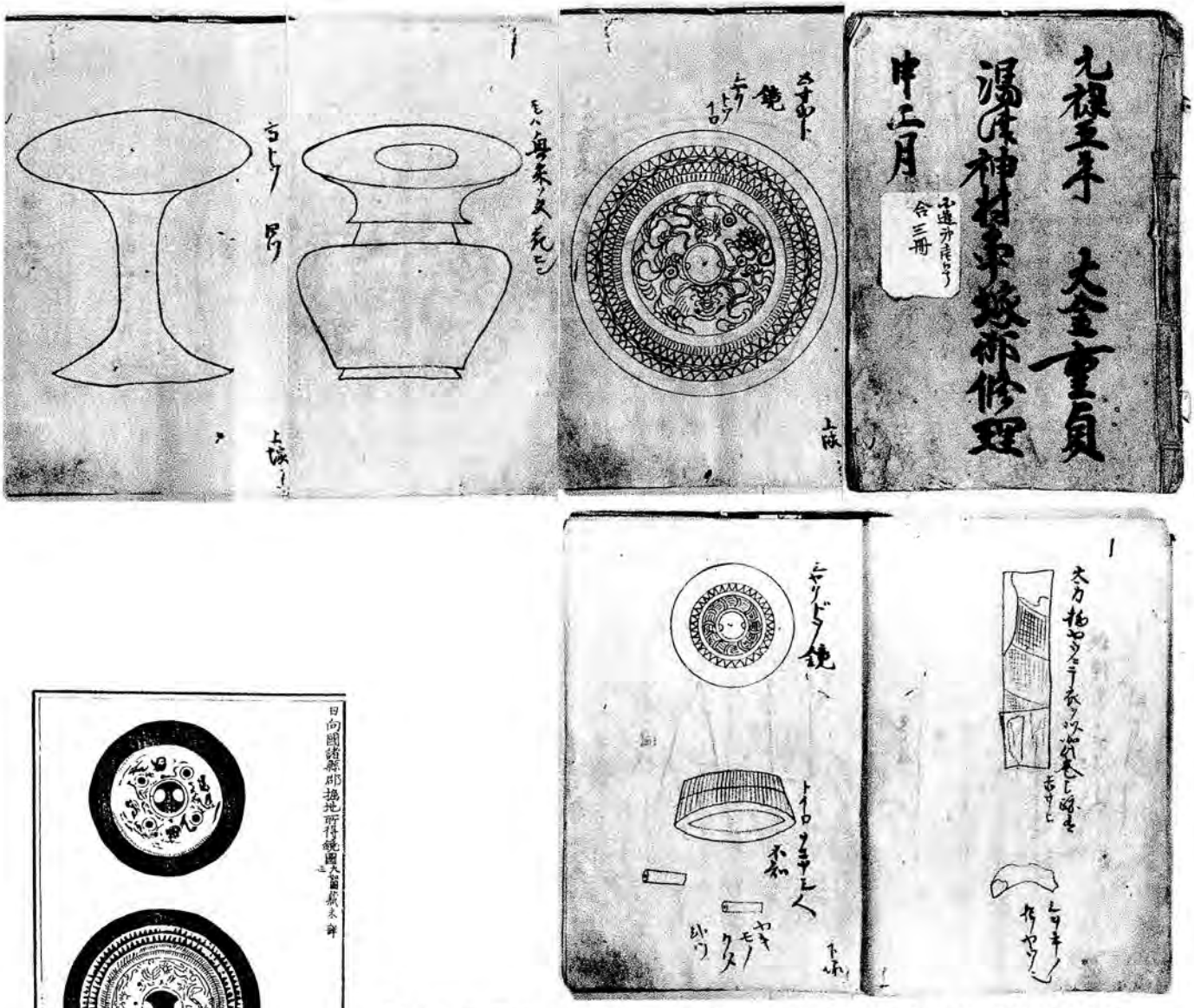


（本文）　史学雑誌第七編第十一號

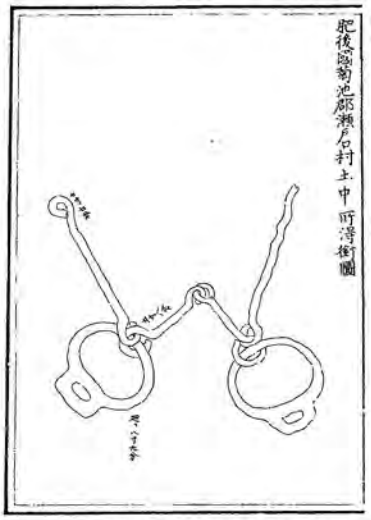
○日本の古墳時代

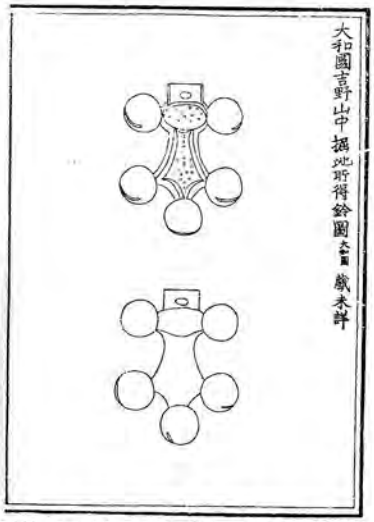
八木奘三郎

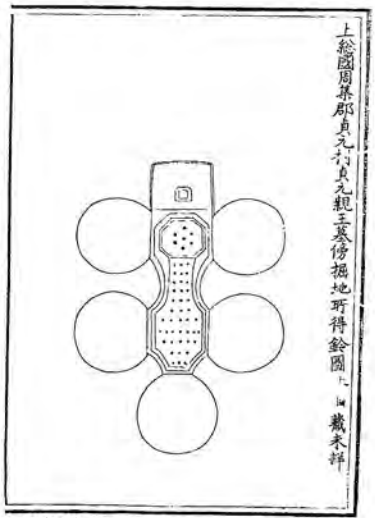
論説雑件　上古の時に當りて人々高大なる墳墓を築造したるは世の普通なる事にして、之れ日本の古墳時代と稱ふる名稱の起因なり。今日是等の材料を採て研究の資に供するものは固より人に乏しからず、既に先輩來會大抵之を論ずるの問題ヒロにせざるは他なし其事實の困難にして且つ世人の注意を惹くに足らざるが如きは固より論ずるに及ばざるものにはあらず、故に今の時に當りて其如何を説明せらるゝ事は最も必要なる事に屬すべきも、其説明するに當りては古墳時代の事實認定に基き、而して他日其研究の歩を進むるの階梯たるを要す。故に普通人は區子の分としても當時の國勢民情の概略を知るが如くせざる可からず。然るに今日學問上の事實は固より其基礎たる事實すら未だ明瞭ならざるもの多きに於ては、之れ



光圀による上・下車塚古墳調査の記録『湯津上村車塚御修理』
(斎藤忠 1979)





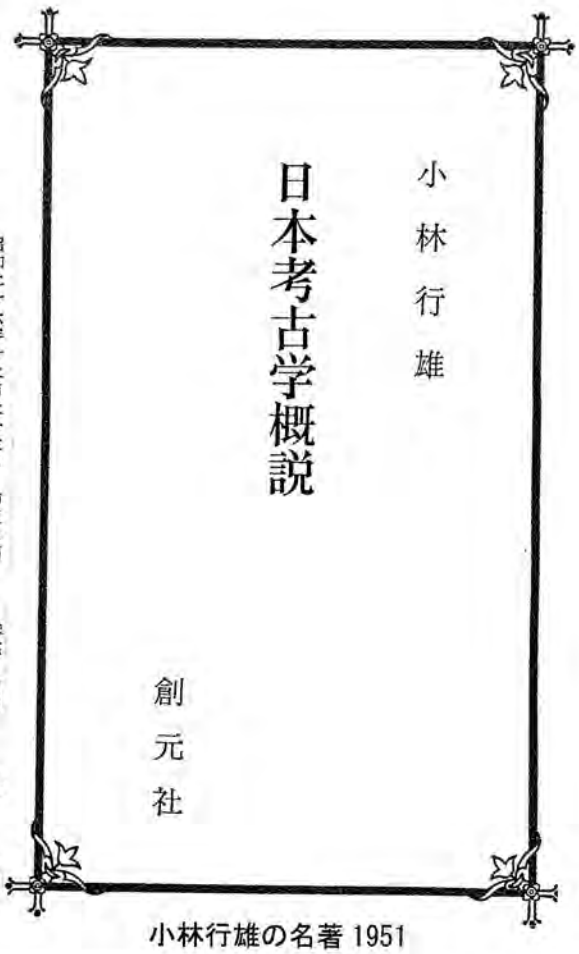


松平定信『集古十種』に見える全国の古墳発見遺物 (斎藤忠 1979)

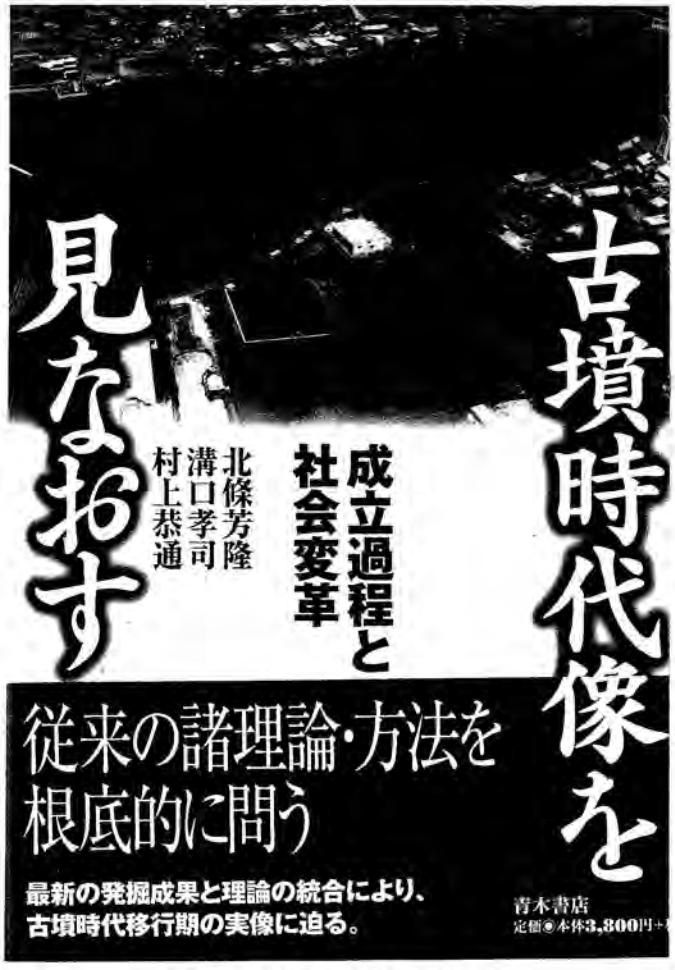
戦後進んだ古墳時代の見なおし

わが國の古代における階級の發生が、はたして農耕社會としての彌生式時代のうちにその萌芽を認めうるか、はたまた貴族の墳墓が顯著なる存在を示すようになった、古墳時代の開始をもつて劃期されるかという問題は、現時の學界における重要な關心の的となつている。さらに、これらの古墳時代の貴族たちは、その私有せる財富と政治的權力とを以て、一般地方民衆の上に君臨するとともに、畿内を中心とし、そこに最高峰を有する共通の文化を保持したのであるが、このような古墳時代文化における畿内の優位性の存在が、ただちに大和に占據する權力者の政治的優越性を意味し、天皇制國家の成立を立證するか否か、これまた輕々しく斷じえない大きな問題である。

これらの問題を論ずるためには、當時から語り傳えられていた神話傳説を、後代に記錄し編輯したと考えられる『古事記』『日本書紀』などの、史書の内容をも檢討し、考古學と文獻史學との、二つの面からの考察が必要である。かくの如く、古墳時代は不完全ではあるが一應書かれた歷史のある時代と考えられるので、事實に即した歷史記錄を有する後の歷史時代と區別して、これを原史時代と呼び、またそれ以前の繩文式時代及び彌生式時代を先史時代と稱することも一般に行われている。これらの三つの時代の考古學的研究が、それぞれ文獻を利用しうる程度の相違に應じて、異つた態度・方法を必要とすることはいうまでもないことである。



小林行雄の名著 1951



北條・溝口・村上 2000

日本史研究会編集

日本史研究 343

1991.3

1990年度 日本史研究会大会特集号

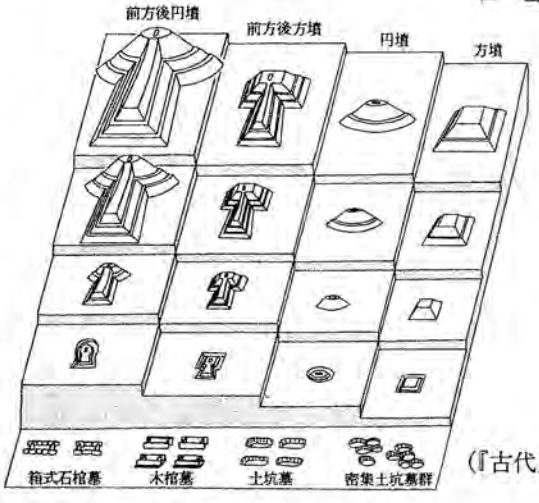
大会統一テーマ 社会構造の変容と国家

全体会シンポジウム

テーマ 前近代国家論の再生のために

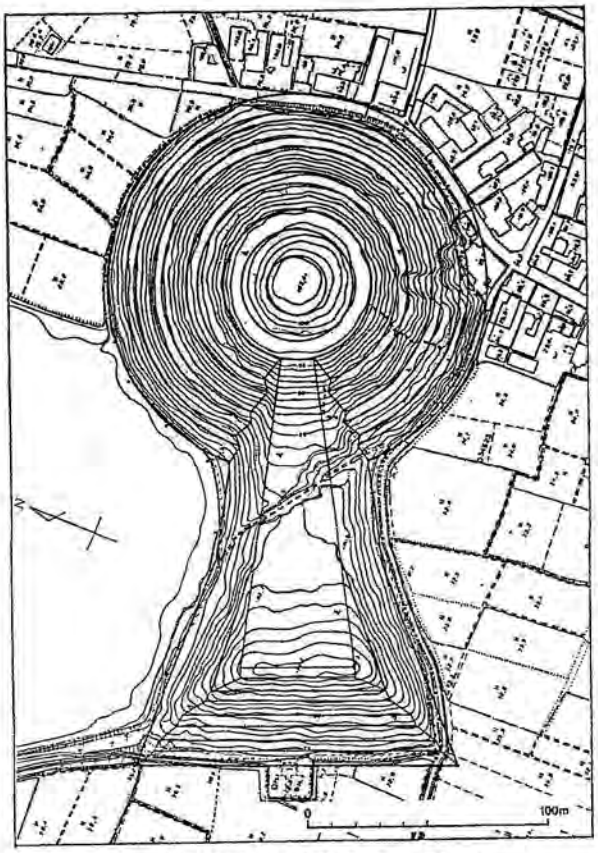
日本古代の国家形成論序説 都出比呂志
—前方後円墳体制の提唱—

コメント 熊野聰
石上英一

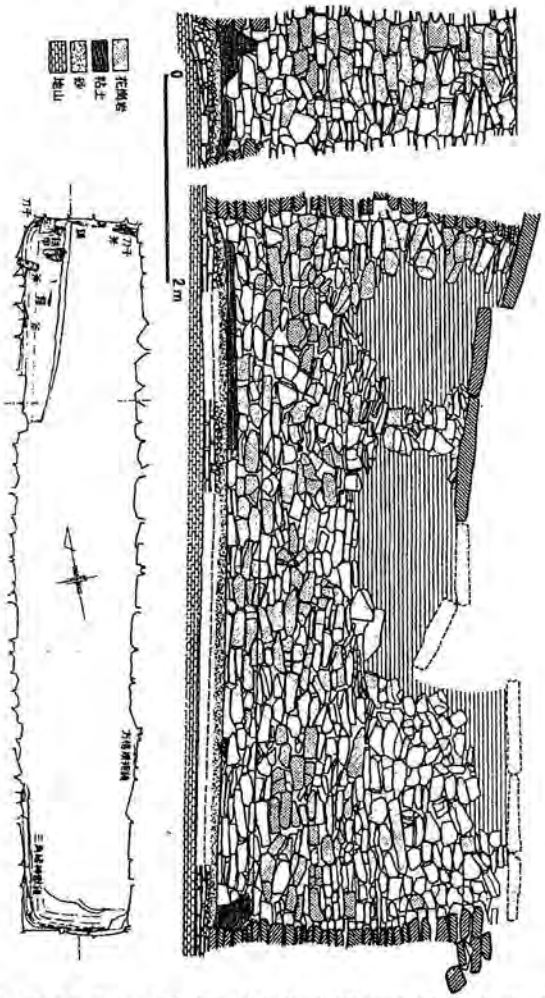


(『古代史発掘』6, 1989)

都出比呂志 1991 論文と 1989 図式



定形的な前方後円形の墳丘
（奈良県箸墓古墳：白石ほか 1984）



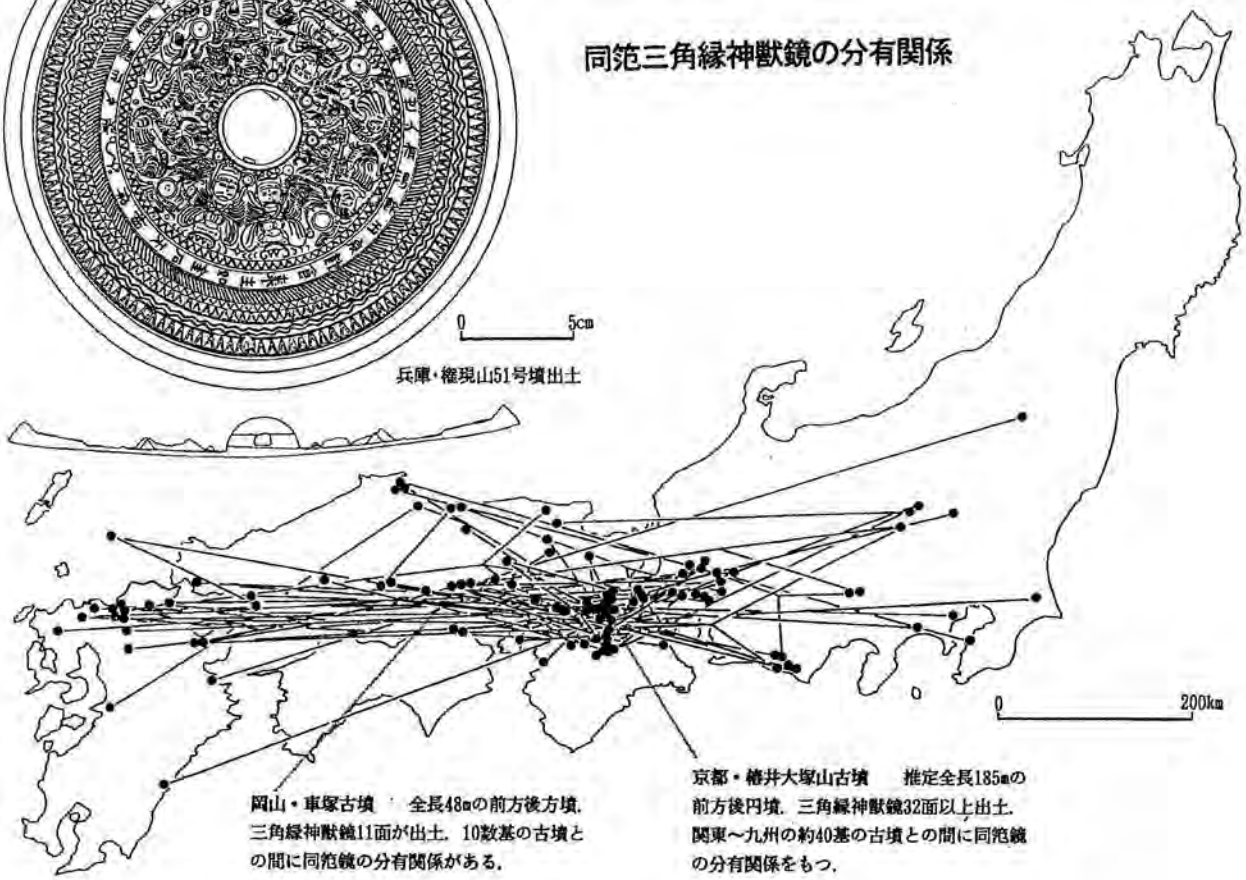
長大な竪穴式石室（京都府椿井大塚山古墳：京大 1989）

中国（後漢・魏）鏡の多数副葬
（奈良県黒塚古墳：橿考研 1999）

「定型的前方後円墳」をもって「古墳」の始まりとみる

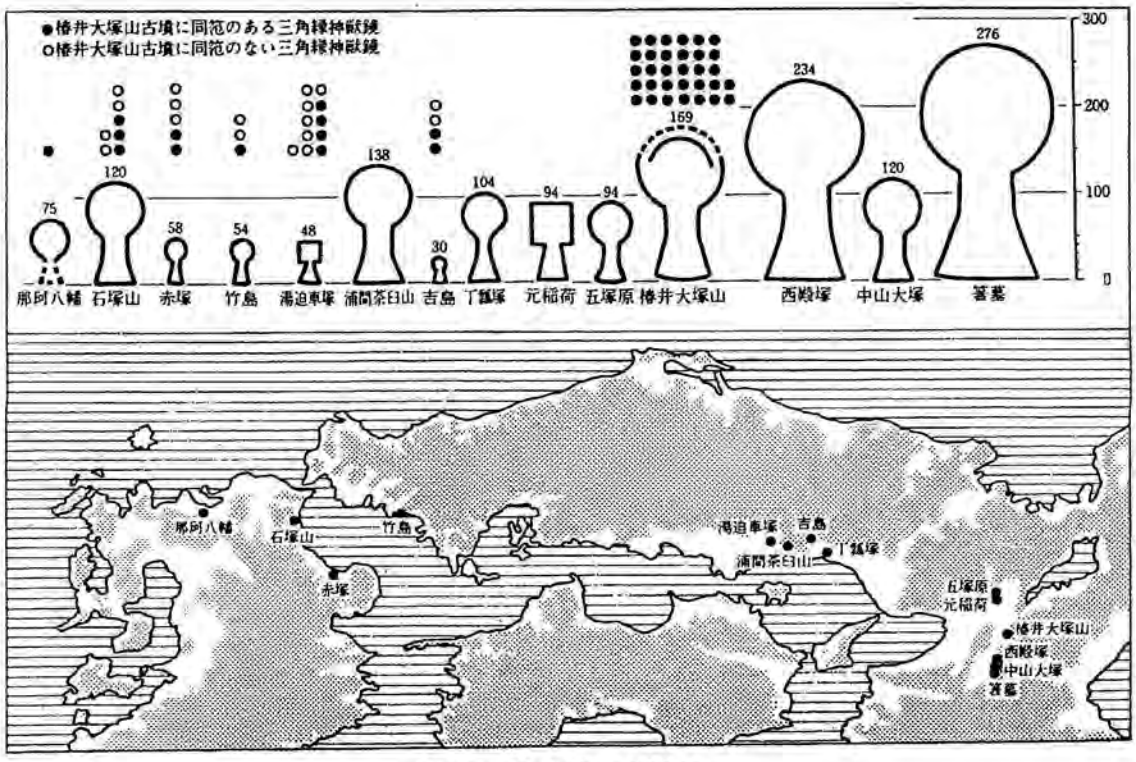
[1] 同笵三角縁神獣鏡の分有関係　舶載・仿製を合わせた同笵の三角縁神獣鏡の分有関係を点と線であらわした．ただし，同笵の認められない鏡の分布は省いてある．

兵庫・権現山51号墳出土



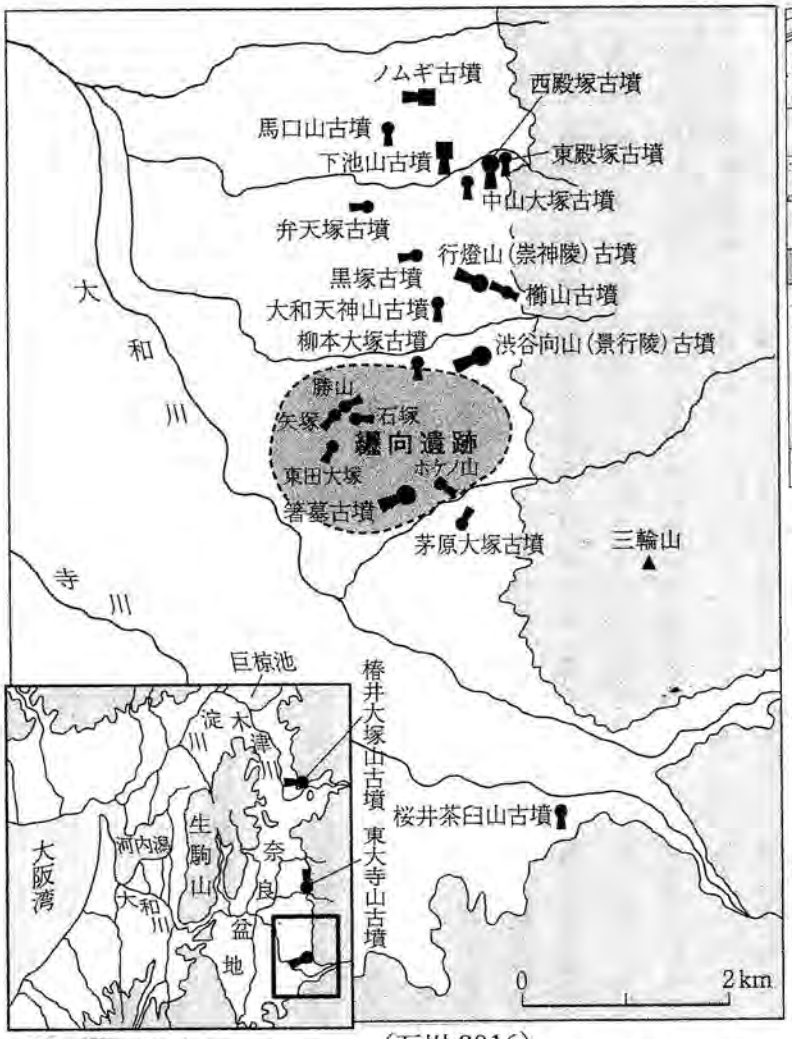
岡山・車塚古墳　全長48mの前方後方墳．三角縁神獣鏡11面が出土．10数基の古墳との間に同笵鏡の分有関係がある．

京都・椿井大塚山古墳　推定全長185mの前方後円墳．三角縁神獣鏡32面以上出土．関東～九州の約40基の古墳との間に同笵鏡の分有関係をもつ．

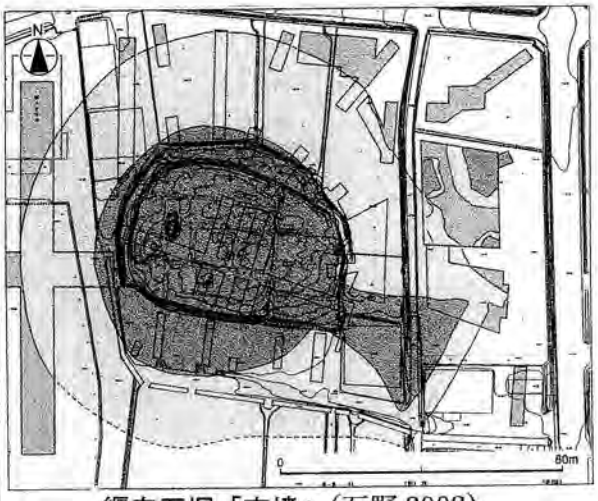


最初期の前方後円(方)墳

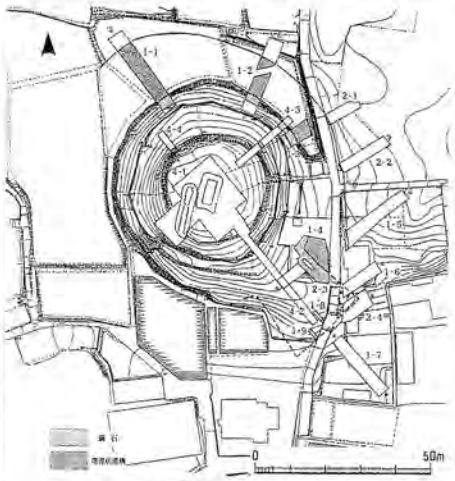
畿内を中心とする同笵鏡と定型的前方後円墳規格の序列



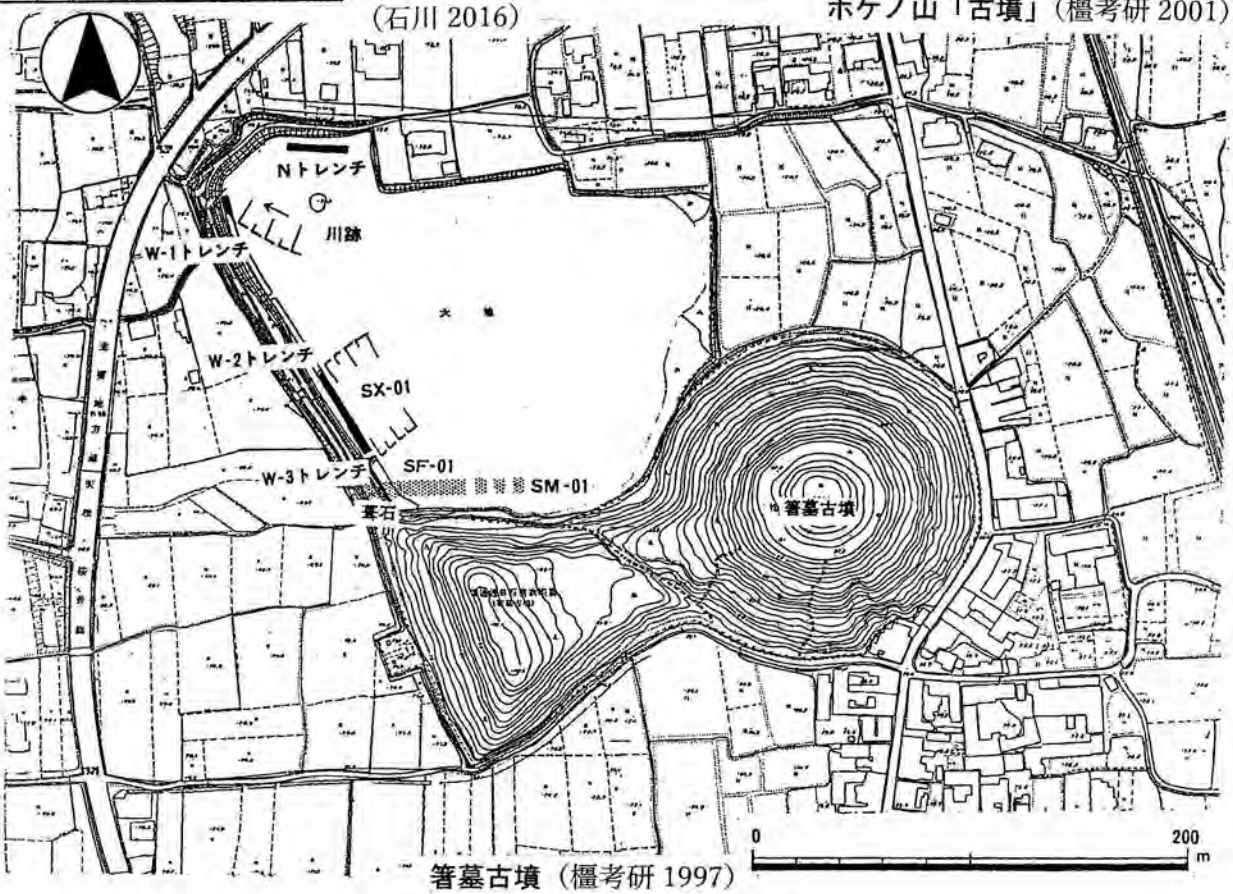
(石川 2016)



纒向石塚「古墳」(石野 2008)



ホケノ山「古墳」(橿考研 2001)



箸墓古墳 (橿考研 1997)

纒向遺跡とオオヤマト古墳群